

## 平成 26 年度母子保健指導者研修会

開催月日	平成 26 年 10 月 27 日(月) 14:00~16:00		
会場	横浜情報文化センター 情文ホール		
テーマ	こどもの事故は予防できる		
講師	出口小児科医院 (長崎県大村市)	出口 貴美子	院長
座長・講師	日本セーフティプロモーション学会理事	稲坂 恵	理学療法士
参加者	104 人		

座長 稲坂理学療法士が進行

### 1 子どもを事故で死なせない、後遺症を残さない環境づくり

人間の脳は生後急速に発達していく。大事に育むことが大切である。ハイハイや一人歩き等の運動発達に遅れて、言語理解や危険予知能力などの高次脳機能は3歳以降に急激に伸びていくという、運動能力と理解力・認知能力の発達のアンバランスが、3歳未満に事故が多発する原因と考えられる。特に重度な頭部外傷は、高次脳機能障害を引きお越し、発達の妨げ、後遺症を残す。

### 2 事故を予防するには

3歳未満の子ども達に怒ることや「見守り」は役に立たない。事故は一瞬にして起きる。子ども達が転倒することは止められないが、外傷にならない柔らかい床にする、家具等の角を取る等で、予防は可能である。まず「事故は予防するもの」という意識改革が大事。

今まで事故は治療と共に終了したので、事故予防対策に事例が活かされず、対策がとれなかった。事故情報が集められ、原因が分析され、その情報をメーカーや自治体にフィードバックされることで、対策を講じることが可能になり、そのシステムが循環することで安全な社会が構築できる。

「子どもを守りすぎることはよくない」という人もいるが、安全はこどもの発育に欠かせず、子どもを健康で活動的にする。事故予防はミス・失敗を許容し、チャレンジ精神を伸ばす方法として必須である。子ども達だけでなく、現場の先生・保護者を守る。Healthy,Active,Safe!!

### 3 Love & Safety おおむらの活動

地域参加型研究アプローチが特徴。大村市では、子供の事故情報を医師会、幼稚園・保育園などが収集するサーベイランスシステムがある。産業技術総合研究所と提携して、その事故情報を科学的に分析し、結果を地域にフィードバックすることによって、大村市民、保護者、学校関係、警察などそれぞれの立場から課題を見つけ、それぞれの立場で出来る事を考え、実行していく。これらを大村市民で共有し、このシステムが地域に根付くように活動をしている。

<具体的な取り組み>

- ・遊具の事故の調査結果 →階段の色を変えることにより、言葉でなく視覚的に危険を認知させるなどで環境を整える。リーフレットの作成などでわかりやすい情報で提供を行なっている。
- ・3歳以上では自転車事故が多い →小学生を対象に講話 アンケート調査 DVD 作成 リーフレット作成  
→ブレーキ反応時間の実験 手が大きくなるのでブレーキレバーを調整する必要性を周知
- ・消費者庁のキャラクターとキャンペーンソング「アブナイカモ」の創作ダンスを保育園・幼稚園等が映像作成しコンテストの開催
- ・イベント Love&Safety フェスタの開催

こどもの事故予防は、楽しく！

日本セーフティプロモーション学会理事 稲坂恵 理学療法士

Safety Kids いずみに所属して、事故予防の情報発信 親子対象の事故予防講座 事故予防をテーマにしたカレンダーの制作を行っている。

子どもの死亡原因のトップは不慮の事故である。こどもの事故は多く、室内や屋外のいろいろな場面で起きている。事故対策は事故発生を分析し、対処法を教育していく。

<災害からの教え>

川の急増水で助かった子：着衣水泳などの防災教育が活かされた。

東日本大震災で生き延びた事例：自分の命は自分で守る

<アメリカの取り組み紹介>

- ・事故予防について年中・年長から中学2年まで2歳毎に教材があり、系統立てて教育している。
- ・ベビーシッター(中学生向け)の教本に日本の大人が知らない事故予防の詳細が記載されている。

<事故予防のポイント>

- ・「不慮の事故」は、思いがけず発生するのでなく、原因があるので、予防は可能
- ・事故に日本独特の文化が関わっている。浴槽の溺れや、物を吸い込んだの喉詰
- ・子供を守るだけでなく、自分で守る教育も重要 冒険遊びで防衛能力を向上させる。